

## 私の八月十五日



共同電機株式会社  
代表取締役社長 庄野敬次郎

私の所属部隊である満州第2639部隊（第17野戦自動車廠）は駐屯地、西東安から牡丹江に移動集結した。当時の関東軍は太平洋戦争後半に至り、南方始め沖縄に転用され、主力は未熟、半装備の集団にすぎなかった。当時のソ連兵力は160万、戦車4,500、航空機4,000、と聞かされている。対する関東軍は、兵力75万と、わずかな火器、航空機はゼロに近い。

その状況下でソ連参戦を迎えたのである。私は兵技上等兵として、小倉中隊（第1移動修理班）第1小隊長、長瀬少尉の指揮下にあった。

**昭和20年 8月 9日** 午前0時、ソ連軍満州国、国境を侵犯、各方面より進撃を開始、第2639部隊は直ちに戦時体勢に入る。第1線部隊弾薬不足のため、前線へ弾薬輸送の命が下り、小倉隊も自動貨車5輛が弾薬輸送のため出動。

**8月10日** 前線における故障車現地修理のため、小倉隊に移動修理班1ヶ少隊を“掖河”に派遣せよ、との部隊命令くだり、長瀬小隊出動。

**8月14日** 戦況は遂に緊迫、軍命令により、17野戦自動車廠は歩兵1ヶ大隊を編成し前線に出動することになり、淵田大隊が編成され、小倉中隊は、修理業務を中止して淵田大隊に編入された。

**8月15日** 昼間、掖河において左前方、丘陵上に敵戦車4輛出現、戦車砲の砲撃、空軍の爆撃を受ける。この日の爆撃で戦友3名重傷を負う（打ち2名未帰還）。漸く夜の惟りがありて銃砲声も止み戦場には今までにない静寂がおとずれた。しかし、今夜にもくだるであろう戦車特攻命令（黄色爆薬をかかえ戦車に体当り）を私は静かに私の運命として甘受するより仕方がない、と覚悟をきめていた。私はこの時“死”というものに初めて対決したが、非常に冷静であったことを今、振り返ってみて不思議に思っている。午後11時頃、師団命令がくだった。“師団は直ちに牡丹江を経て、横道河子へ転出する”夢にも思わぬ退却命令である。今まで“死”と対決し、覚悟していた私達には全く意外な命令であった……が、まさに九死に一生を得たのである。

**8月17日** 横道河子に到着。

**8月18日** 隊隊長より終戦の詔勅をきく。

**8月19日** 停戦協定成立、武装解除。

**9月 8日** 労働大隊として編成された私達には、ソ連領に向って長い行軍が待っていた。合計220軒、6日間の強行軍であった。マンドリン（自動小銃）で無雑作に威嚇をするソ連兵に監視されながら虚脱感と失意の兵隊達は黙々と歩く。次々と落悟者が出るが自分が歩くだけで必死である。落悟者も助ける事のできない、まさに死の行軍であった。

それから4年、無事生還してわが家に帰りついたので、**昭和24年 8月15日**であった。

今年（2017年）は敗戦から47年、辛い思い出も次第に風化されようとしているが、あの悪夢のような戦争の傷跡は、体験者である私にとっては絶対に消すことはできない。毎年8月になると“広島”“長崎”で盛大な慰霊祭が行われる。世界最初の、そして唯一の被爆被害者である日本国民がその霊をとむらい、原爆の悲惨さを思いおこしこれを内外に訴えることは国民の義務でもある。

と同時に私は思う。原爆で死亡した人達は、十数万ともいわれるが、少なくとも、これと同じ位の日本人が“シベリヤ”の荒野に斃れ、旧満州を含めれば三十数十万人にも達するのである。しかもこれは戦争が終結し、銃をすてて降伏した後、10年余にわたって続いた残酷な結果なのである。この事は残念ながら忘れ去られようとしている。私がシベリヤにおける4年間の抑留生活の中で“飢え”と“寒さ”の中で死んでいった多くの戦友の姿に接していたから、大きなこだわりをもつのかも知れない。核兵器が将来さらに人類破滅の大きな危機をもたらすことがあるように、シベリヤの悲劇あるいは類似の事件も再び“おこり得ない”と何びとも保証できないであろう。すべては“戦争”によってもたらされた日本民族の痛い体験なのである。

私は毎年8月を迎えるたびに、戦争によって内地を含め、各地で散っていった三百数十万の方々の霊に対し、はるかにその御冥福をお祈りすると同時に、この人柱によって、もたらされた現在の“平和”の尊さを、かみしめているのである。 合掌